第13号

1 May 2014

日本ヴィクトリア朝文化研究学会

The Victorian Studies Society of Japan
Newsletter No.13

第13回全国大会開催

2013年11月9日（土）、甲南大学において、第13回全国大会が開催されました。

午前中は、二つの会場に分かれて、計６本の個別研究発表が行われました。

第１室の報告者は、小西千鶴さん（神戸市外国語大学大学院）、奥村真紀さん（京都教育大学）、設楽靖子さん（武蔵大学）の３名で、司会は原英一さん（東京女子大学）にご担当いただきました。

第２室では、佐藤繭香さん（麗澤大学）、森本（吉村）真美さん（神戸女子大学）、成田芙美さん（津田塾大学）にご報告いただき、並河葉子さん（神戸市外国語大学）に司会をお願いいたしました。６本の研究発表については、次頁以降、報告や討論の要約を載せていますので、ご覧ください。

午後は、総会（関連記事、12～16頁に掲載）の後、シンポジウム「ヴィクトリア朝とヴォランタリズム」が開催されました。高田実さん（下関市立大学）の趣旨説明の後、光永雅明さん（神戸市外国語大学）、林田敏子さん（摂南大学）、大石和欣さん（東京大学）がパネラーとなって、ヴォランタリズムの歴史的意義が議論されました。

大会の最後には、特別対談「歴史と文学の対話―伝記をてがかりにして」が開催され、日本英文学会会長の佐々木徹さん（京都大学）と本会会長の井野瀬久美恵さん（甲南大学）が、歴史と文学の新たな接点を求めて、知的刺激に富んだ創造的な対話を展開いたしました。

大会後、恒例の懇親会が甲南大学学友会館で開催され、会員間の親睦を深めました。

シンポジウムと特別対談の内容については、『ヴィクトリア朝文化研究』第12号（2014年11月刊行予定）に掲載予定ですので、そちらをご参照ください。

目次：

第13回全国大会開催 1

研究発表
小西千鶴 2
奥村真紀 3
設楽靖子 4
佐藤繭香 5
森本(吉村)真美 6
成田芙美 7

研究動向
川端有子 8
石橋悠人 10

2013年度総会報告 12
2012年度決算 14
2012年度懇親会決算 15
2013年度予算 16

会員名簿、会員の業績について 17

第14回大会シンポジウム趣旨説明 18

第14回大会の告知・自由論題報告募集 20

第15回大会シンポジウム・ラウンドテーブル募集

【研究発表１】

Urania Cottage（1847-62）

― ‘Decent Home’を目指して ―

小西　千鶴

1834年の新救貧院法によってシステム化された慈善を批判した作家チャールズ・ディケンズに、自身の慈善に対する姿勢を試される機会が持ち上がった。刑務所を出所した売春婦たちを一定期間預かる保護施設ウラニア・コテッジの設立だ。ディケンズはこの事業に意欲的に取り組むが、事は簡単に運ばない。施設の方針、管理運営をめぐって、発案者で財源を担うアンジェラ・バーデット - クーツとの間に意見の対立が生じたのだ。男性の権威主義的な社会にあって、ディケンズは資本を提供するクーツという女性の異なる意見、旧式な考えに耳を傾けなければならなかった。とはいえ、その遣り取りの積み重ねこそが、この施設にそれまでの売春婦保護施設にはないHomeとしての特質を生み出したのではないか。

まず二人の相違は施設考案の段階から表れる。クーツは、Asylumを設立したいと提案し、それは基本的に福音主義者の運営のもと矯正施設として位置づけられていた当時の売春婦保護施設の概念に則するものだった。一方のディケンズは、設立場所や衣服、その他売春婦たちに対する細かい配慮を示した。次に、施設内で行う再犯防止を目的とした教育においても二人は対立する。ディケンズは訓練システム設立の必要を主張し、キャプテン・マックノーキーの「マークシステム」を取り入れることを強く求めた。しかし、宗教背景を強く持つクーツは反対する。最優先されるべきはモラル教育で、科学的、俗的なシステムが再犯防止や誘惑への拒絶につながるとは、考えなかったのだ。

一方で、思惑の違いはあるものの二人が一致したルールもある。それは退所後の女性たちの海外移住についての考え方である。当時、植民地オーストラリアは、政府の行った女性の海外移住政策により売春婦で溢れかえっていた。その報告を受けた英国国教会は、クーツの財政支援を受け伝道者たちを派遣し教会を設立した。こうした背景から、クーツはウラニア退所後の売春婦たちが移住によってさらに高い道徳性を培うことを期待した。他方、ディケンズは社会では忌み嫌われていた彼女たちに、海外移住によって新たな人生を生きる可能性を残そうとした。

これら二人の取組み方の違いは二人の生い立ちや境遇の違いにある。クーツは由緒ある家柄で、貧困や売春婦を身近な存在として意識することなどあり得ない生活だったので、何よりも売春婦に対する実際的な知識が薄かった。対して、ディケンズは12歳にして教育は中断され靴墨工場で働き一人孤独な貧困の生活を送った。彼が行き来していた荒れた界隈では児童買春も高く蔓延していたという。作家は、そんな少女たちの姿を、比喩を通して共感的に作品でも取り上げている。不条理な境遇に抗えない彼女たちを、不遇な自分自身の幼少期の記憶に重ねる彼の思いはウラニア設立に反映されたといえる。

このウラニア・コテッジ、別称Home For Fallen Womenは、その名称をクーツが提唱したAsylumからディケンズによってHomeへと呼び変えられた。ここには、失われたHomeへの作家の強い思いが重ねられている。財源はクーツから、アイデアはディケンズのものと言われるが、むしろ新しいアイデアで進歩的に慈善に取り組もうとするディケンズと、古い伝統や規律を重んじながら保守的な姿勢をとるクーツの相互交渉の賜物と言えるのではないか。現実と理想、行動と観念、厳しさと優しさの対立とその結果としての両者の融合こそが、これまでにない新しい慈善の形を生み出したのではないだろうか。

【研究発表２】

ヒロインの誕生

ーJane Eyreの翻案劇をめぐってー

奥村　真紀

1847年に発表されたCharlotte Brontëの小説Jane Eyreは、出版直後からベストセラーとなり、順調に版を重ねた。その人気は、原作を離れたところでも、1848年から現在に至るまで絶えることなく、この作品が舞台や映画という形で翻案され続けていることからも明らかである。本発表では、19世紀に発表されたJane Eyreの翻案劇から3本を取り上げ、それぞれ原作の何がどのように強調されているかを考察し、時代を追って分析することによって、ヴィクトリア朝という時代が、Jane Eyreという一つの文学作品をどのような価値観を持って翻案してきたか、そして、その翻案劇がどのように人々に受容されたかを考察した。

19世紀に発表された8本の翻案劇は、いずれもメロドラマとしてテムズ川南岸の劇場で上演されている。1843年の劇場法改正以降、ロンドンで激増した労働者人口にとって、ミュージック・ホールよりも安くつく娯楽となった劇場は大人気となっていた。当時の劇場運営者が観客の好みに合わせてレパートリーを選んだ結果、労働者と同じく「無力な、味方のない」ヒロインであるジェインを主人公としたメロドラマが恰好の題材となった。特に1848年のJohn Courtneyの*Jane Eyre or the Secrets of Thornfield Manor*は、わかりやすいジェインのシンデレラ・ストーリーに焦点を当てつつ、ヒロインの孤児と労働者階級の連携という特徴を持っている。小説のセンセーショナルなプロットだけを使いながら、観客になじみのない上流階級を登場させず、原作にない召使いたちとジェインの友情が重点的に描かれる点で、この翻案劇は当時の上演劇場の観客の好みを反映しているといえるだろう。

1870年に出版されたCharlotte Birch-Pfeifferの*Jane Eyre or the Orphan of Lowood*は、劇場の改築によって1880年代までにミドルクラスの観客がテムズ川南岸の劇場に多く足を運ぶようになっていたという事実を反映し、伝統的なジェンダーロールが再確認される、保守的なプロットとなっている。作品中で強調されるのは、素晴らしく道徳的なヒロインであり、孤児や未亡人の保護者としてのロチェスターが描かれる。観客層の変化だけでなく、1867年の第二次選挙法改正が示すように、男性が社会や家庭を守り、女性はそれを感謝して受け入れるべきだという考え方が社会の根底に根強く残っていたことを示しているといえる。

保守的なこの流れは、さらに1879年に初演されたJames Willingの*Jane Eyre or Poor Relations*で強まっている。この劇ではジェインの苦悩はすべて階級差に根差しており、彼女の自立を求める激しい願いは全く描かれていないことが特徴である。またもっとも興味深いのは、ジェインの美徳の対極に位置づけられるのが、今までのように「狂女」バーサではなく、「堕落した女」として描かれるブランシュ・イングラムであるということだろう。同時代のフェミニズム運動とはかけ離れた、女性に貞節を強く求める男性中心主義が強調して描かれていることは注目に値する。

このように、確かに翻案劇はすべて原作をねじ曲げ、小説の複雑さを無視し、一部の要素だけをセンセーショナルに取り上げているという批判は免れない。しかし、重要なことは、まさにそのねじ曲げこそが、翻案劇が作られることの意味だということである。それぞれの劇が、それぞれの文脈の中で、原作の違う側面に偏った光を当てるからこそ、逆説的に、翻案劇は、それぞれの文脈の中で、一つの小説Jane Eyreが、受け手によって意味を作りだされていく過程を示しており、原作の豊かさを証明しているといえるだろう。

【研究発表３】

コンラッドとヴィクトリア時代の海

ー「東洋の海」を中心にー

設楽　靖子

ジョウゼフ・コンラッド（1857-1924）は、ポーランド出身、イギリス商船で船員として乗務し、37歳からイギリスに定住して作家になった、という経歴をもつ。イギリス商船に乗務してその体験を小説・短篇・エッセイの形で英文学の伝統に持ち込んだコンラッドの生涯と作品の研究において、「海」にまつわる言説との関わりの検証は、他の作家研究に比べて格段の、かつ必須の重要性を持つ。本発表では、前半で、彼の船員体験が実際にどのようなものであったかを、伝記的諸事実を抽出して、「1870年代～90年代のイギリス商船の世界」という文脈の中で具体的に確認した。後半では、行先の一つであった「東洋の海Eastern seas」について、同時代の資料を使ってこの海域でのコンラッドの体験・見聞とその作品化の特徴の一端を提示した。

まず、コンラッドの船員体験の検討にあたって、20年間の船員生活のうち、イギリス商船に乗務した17年間(1878-94)について、航路、船舶、船員という３つの側面から概観した。「航路」については、乗務および旅客として移動した全航路を示す地図を用いて、乗務した航路は主にイギリス商船ネットワークの幹線航路での遠隔地、すなわち喜望峰回りのオーストラリア、シンガポール、バンコク、インドなどであることを確認した。「船舶」の面では、乗務した船のほとんどが帆船の貨物船であり、貨物は、羊毛、石炭、チーク材，砂糖など、帝国経営の要となる品目であった。帆船と汽船の比率において汽船の優位が確定した1880-89年は、コンラッドの船員時代と完全に一致する。「船員」の給与・雇用条件については、コンラッドの場合、乗務契約して海上にいた（すなわち給与の対象となった）日数は54％しかなく、出身地（現ウクライナ）の後見人からの手厚い仕送りに支えられながら、船員の福利厚生施設として整備されていた船員宿舎を有効利用していたとする、最近の伝記研究を示した。

ここまでをまとめると、当時のイギリス商船事情とコンラッドの伝記的諸事実は矛盾しない、つまり、17年間の船員体験は、イギリス商船員の実態を伝える一つのサンプルと言える。一方で、汽船よりも帆船に乗って、近くよりも遠くへ、可能であれば「伝説の探検航海者たち」のルートを通って世界の果てまで見るという目的を持ち、おそらくはその目的のために乗務する船を選ぶ経済的余裕があっての船員生活であった。そして、コンラッドの船員キャリアの終わりが帆船時代の終焉と一致していることから、その目的をかなえることが可能な最後の世代であったと言える。

後半では、イギリス直轄植民地シンガポールを基点とする地方交易船での乗務に焦点を当て、コンラッドにとっての「東洋の海」の特徴は、その交易船のルートがオランダ勢力圏であり、ゆえに英文小説では未開拓の海域であったこと、そこでの限られた体験・見聞を補填した重要な参考書がAlfred R. Wallace著*The Malay Archipelago*（1869）であったことを述べた。このWallaceの旅行記への注目は、当時の英語文献では記述が稀な、しかし進化論のフィールドとしてヴィクトリア時代の科学史と関わりを持つ「オランダの海の遠くの島々」を詳細に記録したWallace本の系譜に、コンラッドの作品を位置づけてみる、という発表者の発想によるものである。

船員生活から人生第３の局面に移行する頃、コンラッドは、新しい職業に入るにあたっての「決意」と「自信」を親しい知人に書き送っている。本発表の最期でその手紙を引用したが、母語以外の言語で作家人生を始める人物が、なぜそうした自信を持ち得たのか。その自信の根拠は、一般のイギリス人が体験し得ない世界を見た、それもヨーロッパ東部境界地域を知る者の眼で目撃した、そしてそれをフィクションにする術を心得ている、という自覚であったろうと想像する。

それゆえ、ロシア帝国の一角から「船乗りになって世界の果てまで見る」という志で参入した外国人に、ヴィクトリア時代後期の海を行くイギリス商船は、それに答えるものを提供し得たと言えよう。それと交換に、イギリス商船の世界は、それまでに語られることのなかった方法で、その伝統なり技術なりを、内部から描ける書き手を得たのである。その書かれ方に何らかの理想化が施されていても不思議はないであろう。

本発表は、2012年のシンポジウム「海の歴史とヴィクトリア時代」に触発されたものである。歴史研究の分野で「ヴィクトリア時代理解の深化のために海の視点の導入」や「文学と歴史学の実り多い協働」が提案されていることは、コンラッドの生涯と作品の研究に多いに参考になると考える。上記シンポジウムで提示された研究動向に、今後も注目していきたい。

【研究発表４】

20世紀の女性参政権運動における アーツ・アンド・クラフツ運動の影響

佐藤　繭香

20世紀のイギリス女性参政権運動は、エメリン・パンクハースト夫人率いる女性社会政治同盟（以下、WSPU）による戦闘的活動（ミリタンシー）で有名である。ミリタンシーという手段を運動に導入することによって、運動は大々的に新聞、雑誌といったメディアで報道されるようになった。大衆の注目を集めることが運動を推進させることに有効であることに気づくと、WSPUをはじめとした種々の女性参政権組織は、大衆の注目を集めるために視覚プロパガンダを重視するようになっていった。では、そうした視覚プロパガンダは、女性参政権組織や女性参政権活動家が新たに生み出した独自のものだったのだろうか？この報告では、女性参政権運動の視覚プロパガンダにみられるアーツ・アンド・クラフツ運動の影響を取り上げた。

美術史家リサ・ティックナーも触れているが、視覚プロパガンダを作り出す上で、大きな役割を果たした女性が３名存在した。ひとりは、女性参政権協会全国同盟（以下、NUWSS）のバナーをデザインしたメアリー・ロウンズ（1856–1929）、ふたりめは、WSPUの様々なグッズやバザー会場の装飾などを担当したシルヴィア・パンクハースト(1882–1960)、そして3人目は、女性自由連盟(以下、WFL)のバザーの会場装飾などを手がけたイーディス・クレイグ（1869–1947）である。この３名は、19世紀後半に盛り上がったアーツ・アンド・クラフツ運動の影響を受けていた。

ロウンズが記したバナー制作のための手引きには、「素材に忠実」であることや自然にある色彩の重視などが彼女の言葉で記されており、これはアーツ・アンド・クラフツ運動を主導したウィリアム・モリス（1834–1896）やウォルター・クレイン(1845–1915)の主張と重なる。また、幼い頃、クレインの描いた「労働の勝利」（1891）を見て、社会改良のためのイラストに感銘を受けたシルヴィアが1909年にWSPUが開催した女性博覧会のための装飾パネルに描いた「種をまく女性」は、クレインの『大義のための画集』(1896)の表紙に描かれた「社会主義の種をまく女性」と似通っていた。

女優エレン・テリー(1848–1928)と建築家エドワード・ウィリアム・ゴドウィン（1833–1886）の間に生まれたクレイグは、父の影響で幼い頃からジャポニスムに親しみ、1908年４月のWFLの「緑、白、黄金祭」の会場装飾では、中世というテーマを選択した。モリスによると、中世は、「協同の共同体」であり、女性にまつわる問題などは発生しない。中世というテーマ選択そのものに、モリスの思想が透けてみえる。

その他に、本報告では、「女性参政権のために働くアーツ・アンド・クラフツの団体」と称され、運動のポスターやWFLが主催したバザーの会場装飾にクレイグとともに協力したサフリッジ・アトリエにも触れた。女性参政権運動史において、運動の活動手段のひとつであるバザーは、ほとんど取り上げられてこなかったメディアであるが、消費活動や娯楽を餌にして女性たちを引きつけた視覚プロパガンダの場であった。アトリエは、1909年のWFLのバザーで展覧会も行い、時にはクレインも作品を展示した。女性の手仕事による工芸品は、当初から参政権活動家が女性らしい女性であることをしめす手段であると考えられていた。

しかし、1912年にWFLが開催した「国際サフリッジ・フェア」からは、アーツ・アンド・クラフツ運動の影響が見えなくなっていた。この時期、WSPUはミリタンシーをより激化させ、運動の形態が変化しようとしていた端境期であった。一方で、アーツ・アンド・クラフツ展覧会協会は、1912年に第10回展覧会を開催した後、1916年まで展覧会を開催することはなかった。4年間の空白の期間は、明らかにアーツ・アンド・クラフツ運動自身の求心力がなくなっていたことをうかがわせる。女性参政権運動のバザーにおけるプロパガンダをみていくことによって、アーツ・アンド・クラフツ運動の盛衰も垣間見えるといえる。

会場からは、女性参政権運動は、アーツ・アンド・クラフツ運動だけでなく、社会主義運動などからも大きな影響を受けているのではないかという指摘があった。今回の報告では触れることができなかったが、女性参政権運動の視覚プロパガンダに影響を与えたものは多い。アーツ・アンド・クラフツ運動は、その主要なもののひとつといえるだろう。

【研究発表５】

ヴィクトリア期イギリスの年少者移民

―徒弟･囚人･里子 ―

森本（吉村） 真美

子ども移民(child migration)とは、近現代イギリスにおいて、成人の血縁者や保護者に伴われない年少者を、公的・私的機関を通じて本国から海外に組織的に渡航させるプロジェクト、およびその対象となった子どもたちをさす術語である。17世紀初頭のヴァージニア児童移民を皮切りに、以後3世紀半もの長きにわたって、カナダやオーストラリア、南アフリカなどの帝国植民地に十数万人もの子どもたちが送られたとされている。子どもの場合、渡航に際する任意性の存否を判断するのは難しく、その点でいえば徒弟として送られた教区貧民や流刑囚などの強制移民も含めて考えるべきであろう。

1980年代に、20世紀に送られた元移民自身の口から施設職員や雇用主による虐待や人権侵害が告発されたことを契機に、この歴史的慣行はメディアを通じて世に広く認知を得た。長年にわたるボランティアの支援活動によって勝ち取られた英豪政府や関係団体の謝罪は、元移民の権利を回復するための大きな成果であったが、同時にそれはこの慣行をイギリス帝国の暗部と断罪するものでもあった。以降、学術領域においても、議会や関係省庁の文書をはじめとする各種公文書や、斡旋団体の活動記録などの一次史料をもとにした研究が積み重ねられてきたが、それらの多くもまた子ども移民を許されざる過ちとみなす、あるいは逆にその反証として、子ども移民を建国の功労者と再評価する、といった道義的な「前提」に縛られがちである。

子ども移民の歴史は長いが、その最盛期はヴィクトリア後期に見出すことができる。この時期には、女性移民で知られるマライア・ライや、わが国の孤児院にも影響を与えたトマス・バーナードらの指導者のもとで、博愛主義の名のもとに大規模なチャリティ移民が展開され、これが今日にいたる子ども移民のイメージの中核をなしている。

報告者は子ども移民を通じてのイギリス近代の再照射を最終的な目的としているが、本報告では、子ども移民全般の概要と枠組みを示し、続いてこの問題を長期的なスパンでとらえたときにあきらかになる以下のような論点を指摘した。

移民チャリティの対象となる子どもは17世紀初頭のヴァージニア移民からほぼ一貫して、都市の貧しい犯罪・非行児童ないしその予備軍とみなされる子どもであった。収容施設での生活・就業訓練ののちに海外に移送し、プランターに引き渡したのちも現地委員会が定期的に監督することができる体制を整えるといったそのシステムについては、児童友援協会や博愛協会、パークハースト少年刑務所などの活動に代表される19世紀中期、すなわち全盛期に先立つヴィクトリア中期がその確立期であった。またこのチャリティへの女性の積極的な参加や、本国委員会と植民地支配層で形成される現地委員会との軋轢、官民の連携、「救済」の資格や受益をめぐる議論、そして奴隷制度と流刑制度という文明国イギリスが廃絶の対象としてきた「非人道的」慣習になぞらえた批判――ライやバーナード、そして20世紀の子ども移民の特色とされるこれらの様相もまた、子ども移民の全盛期に先立って何度も繰り返されてきたものであった。

これらの諸点が示唆するように、さまざまな意味でハイリスクな事業であることがすでに明らかであったにもかかわらず、なぜ子ども移民はヴィクトリア後期にいたって圧倒的な支持を受けその最盛期をむかえたのだろうか。実証研究を含めた詳細は次の機会に譲らせていただきたいが、子ども移民というこの歴史的慣行をひとつの時代文化として多角的に再考することで、ヴィクトリア朝文化研究に新たな視角からのアプローチを試みることが可能ではないかと考えている。

【研究発表６】

イングランドとアイルランドにおける 王立芸術刺繍学校とアーツ・アンド・クラフツ団体

成田　芙美

ヴィクトリア時代には女性の趣味として刺繍が流行し、家庭で家族のために刺繍が盛んにおこなわれた。同時代の後期になると、これとは別に、展覧会で見られる展示品として刺繍を扱うことへの関心が高まった。私はこの動きを刺繍の価値の再評価としてとらえ、ヴィクトリア時代後期において刺繍の価値がどのように見直されたのかを調べてきた。

刺繍の価値の見直しは、主にふたつの流れにおいてなされた。ひとつは1872年に始まる王立芸術刺繍学校(Royal School of Art Needlework)を中心にした流れ、もうひとつは1880年代後半から1900年代初頭にかけて盛り上がっていくアーツ・アンド・クラフツ運動につながる流れである。これらはイングランドに見られた動きだった。

しかし調べていくうちに、王立芸術刺繍学校という名前を共有する組織がアイルランドにもあったことがわかった。また、イングランドにはアーツ・アンド・クラフツ運動の中心的組織として、アーツ・アンド・クラフツ展覧会協会(Arts and Crafts Exhibition Society)があったが、アイルランドにも、これと似た名前に「アイルランド」がついたアイルランド・アーツ・アンド・クラフツ協会(Arts and Crafts Society of Ireland)という組織が存在した。

本発表では、刺繍の再評価の中心的組織として、イングランドとアイルランドそれぞれの王立芸術刺繍学校とアーツ・アンド・クラフツ団体に注目した。そしてこの比較をとおして、イングランドのアーツ・アンド・クラフツ運動の限界と、アイルランドのアーツ・アンド・クラフツ運動の意義を明らかにすることを試みた。

イングランドでの刺繍の再評価は、おおもとにウィリアム・モリス(William Morris)の刺繍の仕事があり、その基盤の上に、まずひとつの中心として王立芸術刺繍学校があり、ふたつめの中心として1887年設立のアーツ・アンド・クラフツ展覧会協会があった。しかし、これらの団体はモリスという接点をもちながらも、直接関わり合うことはなかった。

アイルランドにおける刺繍の再評価の中心のひとつは、まず1870年代後半に設立され、1894年に再組織されたアイルランド王立芸術刺繍学校(Royal Irish School of Art Needlework)であり、ふたつめの中心は、同年に設立されたアイルランド・アーツ・アンド・クラフツ協会である。両者には、同じ年に重要な節目を迎えていること、また、前者の再組織後の責任者Countess of Mayoと後者の会長Earl of Mayoが夫婦であることなど、アーツ・アンド・クラフツ運動の高まりのなかで接点があった。さらに前者は（刺繍学校を名乗りながらも刺繍以外の）複数の手工芸の展示をおこなっていたこと、さらに地域性、民族性の表現を重んじていたという点で、後者と結びつきやすい要素を備えており、そのことも両者の密接な関わりに影響を与えたと考えられる。

以上の点を考慮すると、アイルランドのアーツ・アンド・クラフツ運動の歴史において、アイルランド・アーツ・アンド・クラフツ協会設立以前にアイルランド王立芸術刺繍学校が果たした役割が、もっと認められていいのではないだろうか。また、アーツ・アンド・クラフツ運動の推進者として、上流階級の女性たちを見直す必要もあるかもしれない。同運動が男性中心に進められてきたことは指摘されているが、刺繍の分野では特に、この手工芸の性質上、上流階級の女性たちに負うところが大きいのではないだろうか。

質疑では、アイルランドにおける刺繍の再評価はアイルランド文芸復興運動と関わっていたのではないかということ、また、王立芸術刺繍学校の性質を知るために経営陣についてさらに調べる必要性があることが指摘された。さらに、アメリカの上流社会においても刺繍をめぐる同様の現象があったことが言及された。

【研究動向】

少女マンガのヴィクトリアニズムは何の夢を見るのか

川端　有子

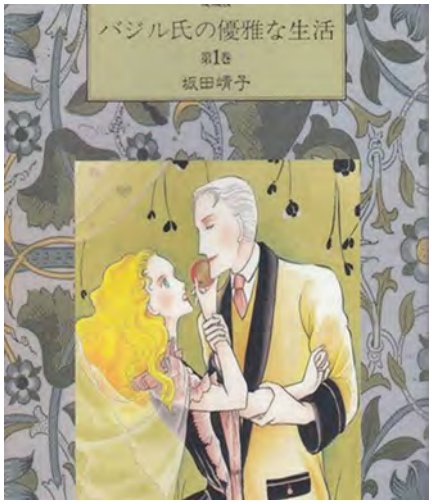
現在、世界で一番よく読まれているマンガは、枢やな作『黒執事』（2006年から雑誌『Gファンタジー』（スクウェア・エニックス）に連載中、現在単行本は18巻目まで）であるという。ヴィクトリア朝を舞台とした奇想天外なファンタジーでありながら、実在の人物 - コナン・ドイルやヴィクトリア女王も重要な登場人物として出てくるし、パブリックスクールや見世物小屋、切り裂きジャックや奇妙なオカルト集団、インドから来たマハラジャの王子、アヘン窟のオーナーの中国人など、舞台設定はいちおう史実的、というか、典型的な大衆的ヴィクトリアンイメージに溢れている。

このマンガはCD化され、アニメ化され、ミュージカル化され、さらに各国語に翻訳されて、今やフランスで大人気、水嶋ヒロ、剛力彩芽主演の実写版映画も今年になって封切られた（ただし、映画バージョンは日本の近未来に舞台を移し、主人公を少女にしているので、魅力的な設定がまったく失われてしまっている）。

自分の家族を惨殺し、自らに辱めを与えた敵に復讐すべく、悪魔と契約を結んだシエルは、弱冠13歳でファントムハイヴ伯爵家の当主となる。魂と引き換えに、シエルに忠実に仕えることを誓った悪魔は、セバスチャンという名前のファントムハイヴ家の執事に姿を変え、超人的（悪魔なのだから当たり前だが）な能力で、執事の仕事をこなしつつ、シエルとともにファントムハイヴ家の秘密の任務、ヴィクトリア女王を守る「陛下の犬」として活躍する。

思えば、ヴィクトリア朝のメイド、エマと富裕な商人の長男ウィリアムの、階級を超えた恋物語、森薫の

『エマ』（エンターブレイン社『コミックブーム』に2002～06年連載）もまた、この『黒執事』ブームの前にあって各国語に翻訳され、アニメ化され、一世を風靡した少女マンガであった。『エマ』が静かなリアリズムでヴィクトリア朝のメイドの暮らしぶりを淡々と描き出した、非常に緻密で繊細な絵柄の作品であったのに対し、『黒執事』のほうは、波乱万丈、アクションあり、殺しあり、ギャグあり、誘拐事件、陰謀、猟奇的で奇想天外なこと、ティム・バートンの映画のようだ。



しかし、なぜ今、ヴィクトリア朝が少女マンガの舞台として好まれ、描かれるのだろうか。私の研究はそんな素朴な疑問からはじまった。そして、少女マンガの歴史をさかのぼり、おそらく初めて意識的にヴィクトリア朝を舞台にしたと思われる少女マンガ、坂田靖子の『バジル氏の優雅な生活』（白泉社『花とゆめ』連載1980～87年）から、現在進行中の『黒執事』にいたるまでの系譜をたどり、現代の日本の少女マンガ読者たちにとって、ヴィクトリアニズムとは何か、そのどこに魅力があるのかを考察したいと考えている。研究会を毎月行い、最近は、少女マンガだけでなく、少女向けのライトノベル（たとえば、集英社コバルト文庫から出ている青木祐子の＜ヴィクトリアン・ローズ・テーラー＞シリーズ全28巻など）にも対象を広げ、研究会員はメイド喫茶や執事カフェにまで出向いたりもした（ちなみに、いわゆる「ロリータファッション」とメイドのコスプレは別物である、少なくともロリータたちの証言では。それに、「ロリータファッション」は、ヴィクトリアンではなくロココである）。

さらにこれら少女マンガ化されたネオ・ヴィクトリアニズムが、全世界的に輸出されるとき、その舞台設定はいったいどういうものとして理解されることになるのだろうか、というところまで解明できればいいのだが、この現象は、まだまだ先が見えなず、研究がどちらの方向へ行くのか、未だおぼつかないものではある。

文化研究（カルチャー・スタディーズ）というもの

が、ただハイ・カルチャーだけを研究するのではないことはつとに明らかである以上、ヴィクトリア朝文化研究が、当時のイギリスの人口のたった20パーセントを占めるにすぎない上・中流階級の、そのまた半分以下を占めるにすぎないおとなの男の文化の研究であってはならないと常々考えてきた。文学のなかでも、周縁化されがちな児童文学の研究者として、そして女性の研究者として、そして何よりも、21世紀の現代を生きる研究者として、ヴィクトリア朝研究を、現在と関わった形で考えたい、そして19世紀のサブカル、20～21世紀のサブカルを伏流のようにつなぐ現象を解明したい。そんな思いの指し示すところに、「少女マンガにおけるヴィクトリアニズム」というテーマがあったのだ。（他に、現在、19世紀の女子労働者が愛読していた*Princess's Novelettes*という雑誌も研究中である。これは、全世界でも10の図書館にしかないレアな、しかしクズだからレアであるというB級短篇ロマンスの集大成である。）

昨年8月、オランダの古都マーストリヒトに於いて、国際児童文学研究学会の隔年大会が催された。全体のテーマは「子どもとメディア」であり、ヨーロッパ、アメリカ、オセアニア、アフリカ、アジアなど全世界から児童文学の研究者が集い、4日間にわたって研究発表やパネルディスカッション、講演などが行われた。この場を借りて、私は、主に『黒執事』と『エマ』を比較するような形で紹介し、ヴィクトリア朝イングランドの文化や社会背景が、日本のマンガにどこからどう取り入れられているか、その背後にある動機、そして効果とは何なのか、少女マンガの発生の歴史にさかのぼって口頭発表を行った。この発表の準備をしている間、そもそも少女マンガの絵の起源が、明治・大正の竹久夢二、高畠華宵から藤田ミラノにいたる叙情画にあること、その後の少女マンガが、ラファエル前派の絵画や、アールヌーボーの影響を取り込みつつ、絵の洗練度を増していったことなどが明らかとなった。そして、ヴィクトリア朝ものが現れる背景には、一連のイギリス小説を題材とした映画のヒット――実はアメリカ人監督ジェイムズ・アイボリー制作であったり、ティム・バートンとジョニー・デップのコンビ作であったりする――があったことも…。

さて、思いのほかに好意的に受け止められたオランダでの発表は、おおざっぱな概論ではあったが、このテーマがさらにアメリカで人気のスチームパンクSFともつながり、それらの日本への翻訳受容の受け皿にもなっていること、逆にそのスチームパンクが、日本のマンガの影響を受けた「MANGA」化もされていること（明らかに『黒執事』の絵柄の影響が見られる）も再確認できた。ヴィクトリア朝のイギリスを舞台に、オオカミ男や吸血鬼が闊歩する世界で、大女で大胆で勇敢なアレクシア女史が活躍するゲイル・キャリガー作＜英国パラソル奇譚＞シリーズ（Gail Carriger, *Parasol Protectorate*, 2009～12）がその例である（邦訳はハヤカワ文庫から出版されている）。MANGA化バージョンでは、日本のように作者が名前を出しているわけではなく、Art and Adaptation by REMと記載されているだけである。だが、こうして現代日本のヴィクトリアニズムは、アメリカのヴィクトリアニズムとも相互交流しているのだ。

さらに『黒執事』も『パラソル奇譚』も、大好きだ！と私の発表に熱く反応してくれたのはフランス人研究者で、彼女の夫は日本のアニメのフィギュアのコレクターだという。始めた時には思いもよらなかった研究の、国際的・時代的拡大に、いささかとまどっているというのが正直なところではあるが、ヴィクトリア朝文化研究を、今現在進行形の現象と絡めて研究することのわくわく感は、なかなか他では味わえない。

さて、『黒執事』は当初、それほど時代考証がされていたわけではなかった。一巻目はかなりいい加減で、イタリアン・マフィアと麻薬密輸が扱われており、登場人物が携帯電話を操るような場面もあって、作者のほうもそれほどヴィクトリア朝を意識的にきちんと書こうとは、考えていなかったようだ。秋葉原のメイドカフェ・ブームから、TVドラマ、「メイちゃんの執事」などの流行で、今度は執事もので書かないかと、担当の編集者に言われた作者が、ふと思いついた語呂合わせ、「あくまで執事／悪魔で執事」がきっかけとなり、ファウスト伝説のような出だしで始まった物語であった。だが、作者も好評が続いて続編を出していくうちに、作品世界の設定をだんだん細かく調査するようになり、アニメ化にあたって、時代考証に『エマ』のガイドブックを執筆したライターの村上リコが参加することで、どんどん詳細を極めるようになってきた。森薫もそうだが、調べ始めるととことんはまってしまうのがマンガ家である。それが災いして、『黒執事』＜学園編＞では、クリケットのルールに振り回され、少々筋のテンションが落ちてしまった。だが、そこで作者は、パブリックスクールのシステムを調べれば調べるほど、＜ハリー・ポッター＞シリーズがいかに『トム・ブラウンの学校生活』のような「学校小説」の系譜を引いているかに気付いたと語っている。アキバのサブカル、ドラマ、TV、アニメ、映画、古今の児童文学、19世紀の学校小説、それらがまるで時代と国境とメディアを問わないインターテクスチュアリティの網で絡み合っている。解きほぐそうとすれば、ますますもつれるテクストの糸にすっかり絡みとられてしまっているのが、私の研究の現状であり、今後、何らかの形で少しずつ、まとめていければ幸いである。

【研究動向】

時間の帝国

石橋　悠人

19世紀のイギリスは時間意識の変革を世界的な次元で推し進めた。グリニッジ世界標準時と本初子午線の制度化はその象徴的な事例と言えよう。さらに時計が刻む均質的・抽象的な時間をはじめ、厳格な時間規律、余暇と労働の分化、安息日などの思想・慣習が、帝国の地理的な拡大に伴い、その外延部へと浸透した。ここで注意する必要があるのは、こうしたヨーロッパ的な時間観念の普遍化が、「非ヨーロッパ」世界で通用していた時間の意識・制度の抑圧・排除・消失と表裏一体の関係にあったことである。この論点を詳しく検討したのが、G. ナニ『時間の植民地化』（Nanni, 2012）である。オーストラリアと南アフリカの白人入植地を分析対象として、同書は時間制度の改革が植民地統治に不可欠な技法であったことを主張する。本稿では、その議論の概要を紹介するとともに、今後の研究の可能性について若干の私見を述べたい。

イギリスによる時間改革では、植民地の時間観念がヨーロッパの時間観念よりも劣位にあるという理解が前提をなした。例えばアボリジニは、天文の知識や自然の状態（天候や開花の時期など）を観察することで「時間」を知ったという。こうした自然のリズムを基盤に成立するのが「原始社会」であり、これに機械時計の人口的な時間が支配する「文明社会」が対置される。時計時間の欠如は、現地人が時間厳守の意識を持たず、「合理性」を欠いており、ゆえに文化的にも劣るとする評価の根拠として採用される。この評価は白人による時間改革の必要性のみならず、植民地化や土地の収奪・労働の強制の根拠として読み替えられる。かくして時間意識と植民地主義は明確な関連性を有し、文明的な時間観念を持つイギリス人の自己像が時間意識を持たない他者のイメージとの明瞭な対比によって構築された。多数の時計に囲まれた生活は「近代的」かつ「勤勉」であり、効率的な時間規律を会得した文明であるとする思想が、イギリス人としてのアイデンティティの形成に寄与するほどの重要性を持った、とナニは指摘する。

植民地における時間改革の実践では、時計時間の普及と現地民の時間意識の刷新が焦点となる。時計時間の普及は公共時計の設置に加えて、鉄道・電信・郵便制度・天文台などのインフラが整うことで大きく進展した。「時計のない土地」から機械時計のリズムによって生活が組み立てられる社会への転換が結実した、と言い換えることもできる。他方で時間意識の変革は、商人・探検者・科学者・農業経営者らの日常的実践によって進んだが、なかでも帝国各地で伝道活動に従事したキリスト教宣教師たちが大きな役割を果たした。宣教団体間の差異を措けば、総じて宣教師たちは現地民が持つ「不規則な」時間観念を取り除き、厳密な計画や予定表に依拠する生活の実現を課題として据えた。ミッションの内部には時を告げる鐘が掲げられ、そこに暮らす現地民の活動を時間という観点から管理することが模索された。7曜日によって構成される1週間という単位、規則的な労働、四季のサイクル、安息日などの慣習・思想を定着させることが、文明化の実践に他ならないとする理念がこれらの活動の根幹にあった。

時間の無為な浪費を避けるべきとする徳目の移植も注目に値する。時間の節約という思想自体は19世紀に登場したわけではなく、既に西洋中世にその原型を確認することができる。しかし18世紀後半以降のプロテスタント福音主義の隆盛のなかで、時間を効率的に使うことが救済につながるとする感性があらためて脚光を浴びた。福音主義と産業資本主義の発展による聖俗の時間意識の結合が、時間厳守や時間の節約といった思想に大きな価値を付与した。福音主義者や他の入植者たちは、このような時間意識を植民地社会に持ち込み、現地の人々が「正しく」時間を消費することを推奨した。ところで、19世紀末から20世紀前半のベイルートにおける時間意識を分析したV. オーグル（Ogle, 2013）によると、アラビア語に翻訳されたS. スマイルズ『自助論』の出版（1880年）が、中東社会において時間の節約と有効活用に対する大きな関心を呼ぶ契機となった。それに続いてアラブ人の著作家たちも「時は金なり」を訴える啓発書を続々と出版したことで、このような時間の消費に対する姿勢がますます普及したという。

もとより、植民地社会における時間改革は各地で強い抵抗にあった。オーグルによれば、20世紀初頭にインドのボンベイ（ムンバイ）では、現地時間に代えてグリニッジ標準時が導入された。しかしこの政策に対する大規模な反対運動が起こり、「植民者の時間」である標準時ではなく現地時間の維持が強く唱えられた。時間改革がインド統治を強化するものとして受けとめられたのである。ナニが扱ったオーストラリアと南アフリカの事例では、時間が植民地統治の道具としてだけではなく、それに対抗する現地民の手段ともなっていたことが明らかにされている。安息日の無視によるキリスト教的時間秩序への抵抗や時計時間を告げる鐘の破壊をはじめ、労働や教育のために白人が割り当てた時間の放棄などが頻発した。現地民のなかには安息日の原則を受け入れる一方で、それを日曜日に白人のために働くことを避けるための論理として戦略的に利用する人々もいた。イギリス側による一方的な時間秩序の押し付けやそれに対する単なる抵抗という図式ではなく、両者は相互交渉的に時間の調整を行い、それぞれの時間秩序のすり合わせを図った、という視点が提起されている。

以上のような時間の帝国史に関する近年の成果が示唆するのは、ヴィクトリア時代の時間意識に関する研究をさらに深化させる可能性と言える。時間意識がイギリスの自己像を規定するほど根本的な要素であったとすれば、その内実をあらためて考察することが不可欠な作業になるからである。標準時の普及や機械時計の進化などの科学技術史の主題に加えて、時間の消費に関する思想や労働時間と余暇との関係などの主題を再考することが重要な課題になるだろう。時間意識という難題への接近にむけて、イギリス史研究のみならず、文学・芸術作品の分析なども含む領域横断的なアプローチが有効になることは言うまでもない。また、時間の標準化に関する従来の研究では、主に本国の科学者・政治家たちの活動に焦点が当てられていた。今後は植民地で働く宣教師・商人・探検者・科学者・農業経営者などの日常的実践が、グローバルな時間改革の展開に与えた影響を本格的に検討することが求められる。時間の歴史の追求により、ヴィクトリア朝研究に新たな展望を切り開く可能性は大いにある。

参考文献

Nanni, Giordano. 2012. *The Colonisation of Time: Ritual, Routine and Resistance in the British Empire*. Manchester: Manchester U. P.

Ogle, Vanessa. 2013. 'Whose Time Is It? the Pluralization of Time and the Global Condition, 1870s-1940s', *The American Historical Review*, 118 (5): 1376-1402.

日本ヴィクトリア朝文化研究学会2013年度総会報告

日時：2013年11月9日(土)　13時～13時30分
場所：甲南大学 岡本キャンパス 5号館511教室

Ⅰ　報告事項

１．2013年度活動報告について

運営委員会(1回目[8月]、2回目[1月開催予定])
理事会(11月、大会の前日)
編集委員会(3回[2月に1回、7月に2回]) の開催
会員名簿（ウェブ公開用）作成のためのアンケート再依頼（4月～5月）、年度内に公開予定
第14回大会シンポジウムの企画募集（4月[メーリングリスト];7月[ホームページ])
東日本大震災に関わる活動の調査（4月～5月）
大会案内掲載（10月[『Web英語青年』の「片々録（予告）」欄」；『WEBマガジン　Lingua』の「学会情報（予告）欄」）

２．ニューズレターについて

第12号5月に発行
今後は特別講演は学会誌に、会員の業績はホームページにそれぞれ掲載し、本学会が発行する媒体ごとの棲み分けを図る方向で編集を進めていく予定

３．学会誌について

第11号（論文2篇、書評12篇、トピックス３篇）11月に発行

４．日本ヴィクトリア朝文化研究学会優秀論文賞について

松浦愛子氏の「ヴィクトリア朝劇場空間統制のポリティクス―「群衆」から「市民」へ」が日本ヴィクトリア朝文化研究学会優秀論文賞佳作を受賞
受賞者が総会に出席できないため、授賞式は行わないことになった

Ⅱ　審議事項

１．2012年度決算について

報告の通り了承
監事の交代（佐々木徹氏にかわって河村民部氏が担当）

２．2013年度予算案

予算案を了承

３．学会誌投稿規程の改訂について

文字数制限を緩和して、和文16,000字、英文6,000語であったところを、和文20,000字以内（図版を含む）、英文8,000語以内（図版を含む）に改訂
版の大きさ、表紙デザインの変更も検討中

４．非会員招聘者の交通費、宿泊費、謝金について

シンポジウムや特別講演を行う、国内の非会員に交通費（領収書等の提出により実費）、宿泊費（1万円）、謝金（原則として1万円、ただし運営委員会の議を経て、1万円を超える謝金を支払うことができることとする）を支払うことを決定

５．2014年度大会について

上智大学で2014年11月8日(土)に開催予定

６．役員改選

原案を了承

７．その他

特になし

総会

高田
光永
林田

日本ヴィクトリア朝文化研究学会
2012年度決算報告書
(2012.4.1～2013.3.31)

《収入の部》　　単位:円

項　目	金　額	備　考
前年度繰越金	5,285,057	
利子	707	
出展料	30,000	6社
学会費	1,782,000	
大会補助金(中央大学)	60,000	
合計	7,157,764	

《支出の部》

項　目	金　額	備　考
通信費	94,454	
大会経費	640,177	大会会場費、プログラム・ポスター製作・郵送費、アルバイト料、茶菓代など
N. L作成費	112,600	
学会誌作成・郵送費	537,450	
学会誌用図書費	30,251	
振込手数料	32,940	
消耗品費	28,162	
役員会費	25,554	理事会会場費・弁当代、運営委員会お茶代、編集委員会お茶代
役員交通費	120,000	
非会員謝礼、交通費等	187,900	
懇親会補助費	57,100	
その他	36,198	学生アルバイト代(3,000×2名)、HP利用更新(30,198[24ヶ月契約])
合計	1,902,786	1,845,686＋57,100(懇親会補助費)

次年度繰越金	5,254,978	

以上のとおりご報告致します。
2013年4月30日　　会計　大嶋 浩

2013年5月2/日　　会計監査　河村 民部

日本ヴィクトリア朝文化研究学会
2012年度懇親会決算報告書
(2012.11.17)

《収入の部》　　単位:円

項　目	金　額	備　考
懇親会費事前振り込み	200,000	5，000X40名
懇親会費当日支払い	80,000	16名(会員12名＋非会員4名)
合計	280,000	

《支出の部》

項　目	金　額	備　考
口座徴収料金	3,400	振り込みの際、徴収される料金
飲食代等	333,700	謝金(会場設営、料理運搬[学部生12名])を含む
合計	337,100	

次年度繰越金	-57,100	学会からの補助費を充当

以上のとおりご報告致します。
2013年4月30日　　会計　大嶋 浩
上記の報告は監査の結果、正確であることを認めます。
2013年5月21日　　会計監査　河村 民部

日本ヴィクトリア朝文化研究学会2013年度会計予算案

(2013.4.1～2014.3.31)

《収入の部》　　単位：円

項　目	金　額	備　考
前年度繰越金	5,254,978	
会費	1,698,000	一般会員273名、学生会員20名(2013年3月31日現在)
出展料	25,000	５社
合計	6,977,978	

《支出の部》

項　目	金　額	備　考
通信費	100,000	
大会経費	250,000	
N. L.刊行費	120,000	カラー印刷
学会誌作成・郵送費	550,000	
学会誌図書費	50,000	書評用図書
優秀論文賞	50,000	
振込手数料	30,000	
消耗品費	35,000	文具等
役員会費	30,000	理事会、運営委員会、編集委員会
役員交通費	240,000	運営委員会、編集委員会
非会員謝礼、交通費等	100,000	
予備費	100,000	
合　計	1,655,000	

次年度繰越金	5,322,978	

合　計	6,977,978	

会員名簿の公開について

会員名簿を以下のところにアップしておりますので、ご利用ください。パスワードは2014年3月16日配信のメーリングリストに載っておりますので、ご確認願います。なお、公開用の会員名簿は、今後、年に二回、5月～6月頃と11月～12月頃に更新していく予定です（http://www.vssj.jp/address/vssj-address.xlsx）。

会員の業績について

これまでニューズレターに会員の業績を載せておりましたが、今後は、会員の業績を本学会のホームページの「新着情報」（http://www.vssj.jp/v-news.html）で毎月末にまとめて掲示し、ニューズレターには載せないことになりました。

つきましては、**会員の方は、今後、業績に関する情報を、随時、webmaster（松岡光治氏）までメールでお知らせください。**

「新着情報」に載っている青文字の webmaster をクリックすると、Eメールが立ち上がります。そのメールに業績に関する情報を記入してお送りいただければ、毎月末、その情報が「新着情報」にアップされます。なにとぞ会員の業績の情報収集にご協力願います。

報告できる著訳書は単著・編著・共著・単訳・編訳・共訳に限ります。必ず、以下の記載要領と（例）に従ってください。

（記載要領）
・共著と共訳の場合は自分以外の共著者名と共訳者名を（会員以外は除いて）すべて列記のこと。
・英数字はすべて半角で表記のこと。
・出版社に当該図書専用の紹介サイトがある場合は、その URL も記載すること。

（例１：単著の場合）松村昌家（著）『ヴィクトリア朝文化の世代風景――ディケンズからの展望』（英宝社、2012年2月、3,800円）
（例２：編著の場合）井野瀬久美恵（編）高田実・谷田博幸・金山亮太・小関隆（共著）『イギリス文化史』（昭和堂、2010年10月、2,400 円）
（例３：共著の場合）川崎明子・河内恵子・松村伸一（共著）『亡霊のイギリス文学――豊穣なる空間』（国文社、2012年9月、3,800円）
（例４：単訳の場合）小野寺健（訳）ゴールドスミス（著）『ウェイクフィールドの牧師――むだばなし』（岩波文庫、2012年1月、840円）
（例５：編訳の場合）松岡光治（編訳）『ヴィクトリア朝幽霊物語（短篇集）』（アティーナ・プレス、2013年3月、800円）
（例６：共訳の場合）中島俊郎・玉井史絵（共訳）ルーシー・ワースリー（著）『暮らしのイギリス史――王侯から庶民まで』（NTT出版、2013 年1月、3,600円）

第14回大会シンポジウム

「破壊と創造――第一次世界大戦とイギリス作家たち」

【趣旨説明】

河内恵子

第一次世界大戦という巨大なエネルギーは、さまざまなかたちで表現されてきた。19世紀後半に出現した、自立と男性との平等の権利を求めた「新しい女」たちの運動に則して、戦争を「女性の解放」ととらえる方法がある。モダニズムの発展の時期と重なることから「戦争と新しい表現方法」というスタンスで考察することも可能だ。19世紀末から多くの人たちの心を暗く支配した退化論――これは世紀転換期のすぐれたゴシックフィクションを生み出すひとつの源泉なのだが――と結びつけて「戦争のゴシック性」を語る手段もある。戦争勃発から100年を経た今、このGreat Warを把握しようとする試みはますます増加し、その方法は複雑化している。今回のシンポジウムでは、パネリストは第一次世界大戦時を生きた作家たちに注目し、彼ら、彼女らを軸に、戦争の破壊と創造を考察するという、きわめてシンプルな方法をとった。各パネリストの考察方法と戦争観はさまざまだが、異なる論の交点にはイギリス文学における表象としての第一次世界大戦がみえてくるはずだ。

司会・パネリスト　河内恵子（慶應義塾大学）

「中間地帯（ノーマンズランド）を生きる女たち」

戦争中、階級間の距離は狭くなった、とりわけ、前線（バトルフロント）で活動する女たちのあいだには、階級を越えた連帯感が生じた、と語られることが多い。確かに、生命を削るような危険な任務に就いていた女たちは、過酷な情況を「女の友情」を糧に何とか乗り越えていた。しかし、小さな不満や諍いが差別意識を鋭く覚醒させることがある。所属する部隊のなかでの緊密であるが故に生まれる他者との生理的な異質感。本国（ホームフロント）にいる女たちの立ち位置と、自らが置かれている情況との差異が生み出す愛国心と表裏一体の敗北感。閉塞情況で残酷に爆発する同性愛者への嫌悪感や侮蔑感。戦争という非日常的な場におけるさまざまな差別意識から、Radclyffe Hall とHelen Zenna Smithの作品を媒介にして、20世紀前半のイギリス女性作家に潜む戦争意識を考察してみたい。

パネリスト　遠藤不比人（成蹊大学）

「『育児室の戦争』――心理学化される戦争、あるいはイギリスの精神分析」

『ケンブリッジ20世紀イギリス文学史』は、第一次大戦と文学言語の関係を記述する際、戦争の表象不可能性に注目する。そこで示唆されるのは、表象不能な「過剰」たる戦争が別の表象に

置換・反復されるテクスト的環境である。大戦後イギリスで流行したフロイトの用語でいえば、戦争とはいわば言語＝物語に収容できないトラウマである。ここで興味深いのは、イギリスの女性分析家が「母娘関係」を「育児室の戦争」と見なすことで、彼女らの精神分析が独自の発展をし、同時代の文学言語と連動したという事実である。しかしなぜ、戦争は母娘関係として（外傷的に）反復するのか？　この問題を大戦直後の政治的文脈、特に女性参政権などと接続しながら、第一次大戦がこの時代の言語に与えた意外なインパクトに照明を当てる。具体的には「ブルームズベリー・グループ」の女性分析家A. StracheyとV. Woolfを比較することで、戦争、外傷、女性性（母娘関係）という視点からシンポジウムのテーマに迫りたい。

パネリスト　秦邦生（津田塾大学）

「前衛芸術と『見えない』戦争――ウィンダム・ルイスの場合」

従来のイギリス美術史は第一次世界大戦勃発を前衛芸術運動の挫折の瞬間として語ってきたが、近年の研究は政府主導の「戦争芸術」プロジェクトに多くの実験的芸術家が協力した事実に光をあて、近代芸術と大戦との奇妙な連続性が把握されつつある。「抽象か具象か」という戦前の美的対立軸は、戦中のリベラル・プロパガンダ、戦場経験の伝達と記録、精神的恢復や救済といった、芸術の公的・私的役割をめぐる錯綜した議論のなかで再定義されてゆく。こうした文脈を踏まえて本発表では、特に渦巻派（ヴォーティシズム）のリーダーとして前衛芸術を牽引したウィンダム・ルイスの戦争絵画に注目し、破滅的な戦争を「見る」ことができるのは誰か、いかなる手法がそれを可能にするのか、いや、そもそも戦争を「見る」ことは本当に可能なのか、といった問題を考えてみたい。

パネリスト　中井亜佐子（一橋大学）

「世界大戦とモダニズムの『晩年』」

文学と戦争、文学と歴史の関係を、表象／誤表象の問題系を超えて議論することは可能だろうか？　エドワード・サイードはモダニズム文学を「晩年のスタイル現象」と呼んだが、ベルサイユ条約締結時に30歳だったT・S・エリオットが書いた『ゲロンチョン』に典型的に見られる「若さ」と「老い」が混淆する奇妙な時間性、「反時代的」な歴史感覚には、第一次世界大戦の破壊的なインパクトを見逃すことはできない。本発表では、とくに大戦勃発時に文字通り晩年期に差しかかっていたジョゼフ・コンラッドに注目し、彼が大戦を近代的時間性の帰結＝破綻ととらえ、「遅延される解読 (delayed decoding)」という印象派的な表象の技法から解読不能なアレゴリー形式へとスタイルを変化させる様を、モダニズムからポストコロニアリズムに継承される歴史感覚の表現形式を模索する過程として分析したい。

募集中！

第14回大会のお知らせと研究発表の募集

第14回大会は、**2014年11月8日(土)午前10時**から**上智大学四谷キャンパス**で開かれる予定です。シンポジウムの題目は「破壊と創造――第一次世界大戦とイギリス作家たち」で、コーディネータの河内恵子氏（慶應義塾大学）を中心に、遠藤不比人氏（成蹊大学）、秦邦生氏（津田塾大学）、中井亜佐子氏（一橋大学）の各氏がパネリストを務められます（シンポジウムの概要については、本誌18・19頁をご参照ください）。また今年は法政大学教授の丹治　愛氏に特別講演をお願いすることになっております。講演題目は「E. M. フォースター『モーリス』と緑林――イングリッシュネスと同性愛」です。どうぞふるってご参加ください。

研究発表を希望する会員は、発表要旨(400字)に略歴(氏名、所属、住所、電話番号、メールアドレスを明記)と主要業績を添えてプリントアウトしたものを郵送でお送りくださるか、あるいはメールの場合は、添付ファイルで学会のメールアドレス(victoria@center.konan-u.ac.jp)までお送りください。メールの場合、受け取りの返信が行かない場合はお手数ですが再度送信してください。締め切りは**2014年7月12日(土)必着**でお願いいたします。なお、学会の性質上、研究発表は「文化研究」に比重をおいたものとします。

第15回全国大会シンポジウム及びラウンドテーブルの企画募集

2015年（平成27年）11月中旬頃に開催予定の日本ヴィクトリア朝文化研究学会第15回全国大会（開催場所と日時は今年の8月に決定される予定です。決定され次第、会員の方々に通知いたします）における**シンポジウム及びラウンドテーブルの企画**を募集します。シンポジウムとラウンドテーブルは、それぞれ２時間30分程度（15分間の休憩を含む）の時間枠を予定しております。締め切りは**2014年12月末日**といたします。

シンポジウム及びラウンドテーブルの内容は、本学会の設立趣旨に沿い、広くヴィクトリア朝文化に関わる学際的な視野を持つものが望ましいと考えております。なお、企画の採否については運営委員会（2015年１月開催予定）で決定させていただきます。ご了承ください。

１．応募締切：2014年（平成26年）12月31日（火）必着

２．申請方法：様式は問いません。下記に示す**申請書必要記載事項**を記入して、日本ヴィクトリア朝文化研究学会事務局までE-mailにてご提出ください。下記のシンポジウム・ラウンドテーブル企画申請書（Excel形式）を利用していただいても結構です。

★シンポジウム・ラウンドテーブル企画申請書フォーマット（Excel形式）
（http://www.vssj.jp/conferences.htmlからダウンロードしてお使いください）

３．申請書必要記載事項：
①シンポジウム/ラウンドテーブルのタイトル
②趣旨　(400字程度にまとめてください)
③企画立案者(氏名、所属、連絡先住所、電話番号、E-mailアドレス)
④プログラム
１）司会（氏名、所属）
２）報告者（氏名、所属）
３）各報告者の題目および報告要旨（200字程度）
４）タイムテーブル（全体で2時間30分程度[休憩含む]におさまるように計画してください）
※シンポジウム/ラウンドテーブルに参加いただく非会員の方には、交通費、宿泊費、謝金をお支払いいたします。

４．提出先：日本ヴィクトリア朝文化研究学会事務局（右記）

★会員名簿、業績紹介について、17頁をご確認ください。

日本ヴィクトリア朝文化研究学会
事務局
〒658-8501 神戸市東灘区岡本 8-9-1
甲南大学文学部 井野瀬久美惠研究室
Tel: 078-435-2344　Fax: 078-435-2578
E-mail: victoria@center.konan-u.ac.jp
http://www.vssj.jp/